

「神のタイミング」

マルコによる福音書 15章42節～16章1節

聖学院中学校高等学校 チャプレン 井本 晴雄

今日金曜日は、今年の教会のカレンダーでは、キリストが十字架にお架かりになった金曜日です。英語では、どういうわけかこの金曜日のことを Good Friday と呼びます。

聖書の記述によると、キリストは木曜の夜に捕まえられて、つまり昨夜のこと、夜通し違法な裁判にかけられ、そして今日金曜日に、イエス・キリストは十字架につけられてしまうのです。

その直前の日曜日、これを棕櫚の葉を道に敷いてキリストを町に迎え入れたことから、棕櫚の主日と呼びます。その日、今年のカレンダーでいうと、この前の13日の日曜日にキリストは当時のユダヤの首都エルサレムにやって来られ、そして木曜日の夜に、逮捕され、金曜日に十字架につけられます。日曜日に大歓声の中で迎え入れられたキリストは、その週の金曜日に十字架につけられ、殺されるのです。

あの有名な、イタリアのミラノの教会の壁面に、ミケランジェロによって描かれた最後の晩餐の絵を思い出していただければと思いますが、イエス・キリストが弟子たちと最後にとった食事、それが木曜の夜の出来事であり、最後の晩餐と呼ばれる出来事であります。その後逮捕、裁判、翌日の金曜午前9時頃に十字架につけられ、午後3時に息を引き取ったとあります。当時の暦は土曜日が安息日と呼ばれ、仕事をしてはいけない日でした。仕事と言っても、火を使った料理や、荷物を運ぶこともその仕事に含まれていました。当時の一日のスタートは夕暮れですから、金曜日の日暮れとともに土曜日がはじまります。今日金曜日の夕方からは、土曜日が始まるのです。ですから、金曜午後3時に亡くなった主イエスの御遺体を、もし墓に納めたいと思ったら、数時間の間に済ましてしまいか、24時間以上たった土曜日の夜まで待たないといけなかったのです。十字架上に亡くなった主イエスのお身体をまる一日以上放置するのは忍びないと考えたのでしょう。ヨセフという人が主イエスのお身体を引き取りに来たのです。金曜の夕刻です。

既に夕方になった。その日は準備の日、すなわち安息日の前日であったので、アリマタヤ出身で身分の高い議員ヨセフが来て、勇気を出してピラトのところへ行き、イエスの遺体を渡してくれるようにと願い出た。

イエスの御生涯は終わったのです。あのキリストと呼ばれ、いよいよこれからと思っていたのに、主イエスは犯罪人のひとりとして殺されたのです。イエスのお身体が十字架から降ろされ、埋葬のために

運ばれていくのを近くにいた女性たちは見つめていました。そして、彼女たちこそ、何かできることをしようと思ってイエスのお身体に塗るための香料を買って塗ろうと思った。でも安息日が始まってしまった。金曜日、その日が暮れてしまった。安息日が終わるまでまる一日なにもすることができない。このときの女性たちの落胆ぐあいはどうだったでしょうか。期待していた救い主が現れた、でも十字架で殺された。そのイエスに、せめて葬りのための備えをしてあげたいと思った。でも安息日だから待てと言われた。彼女たちにしてみれば、すぐにでもイエスの御遺体に出て、そしていねいに葬ってあげたかった。それがせめてもの出来ることだから。でも安息日が始まったから待たないといけなかった。仕方ないことだけれども、待つしかなかったのです。

わたしたちの人生にも同じようなことがあります。せっかく準備したのに、いよいよと思っていたのに、神からストップがかけられた。「待て」、と。こんなに準備したのに、一生懸命準備したのに、待て、と言われた。そんなとき、わたしたちは「どうして?」と思うのです。「なぜ」と思うのです。せっかく良いことをしようと思っているのに待ちなさいと言われた。でもそれは、人間のタイミングと神のタイミングが少しずれているだけなのです。希望が途絶えたわけではなくて、ただ遅れているだけなのです。なぜなら、翌々日墓に行った女性たちは素晴らしい知らせを聞くからです。日曜の朝の復活の出来事です。

『墓の中に入ると、白い長い衣を着た若者が右手に座しているのが見えたので、婦人たちはひどく驚いた。若者は言った。「驚くことはない。あなたがたは十字架につけられたナザレのイエスを捜しているが、あの方は復活なさって、ここにはおられない。御覧なさい。お納めした場所である。』

(マルコによる福音書 16 章 5～6 節)

2014年4月18日 聖学院中学校高等学校 全校礼拝